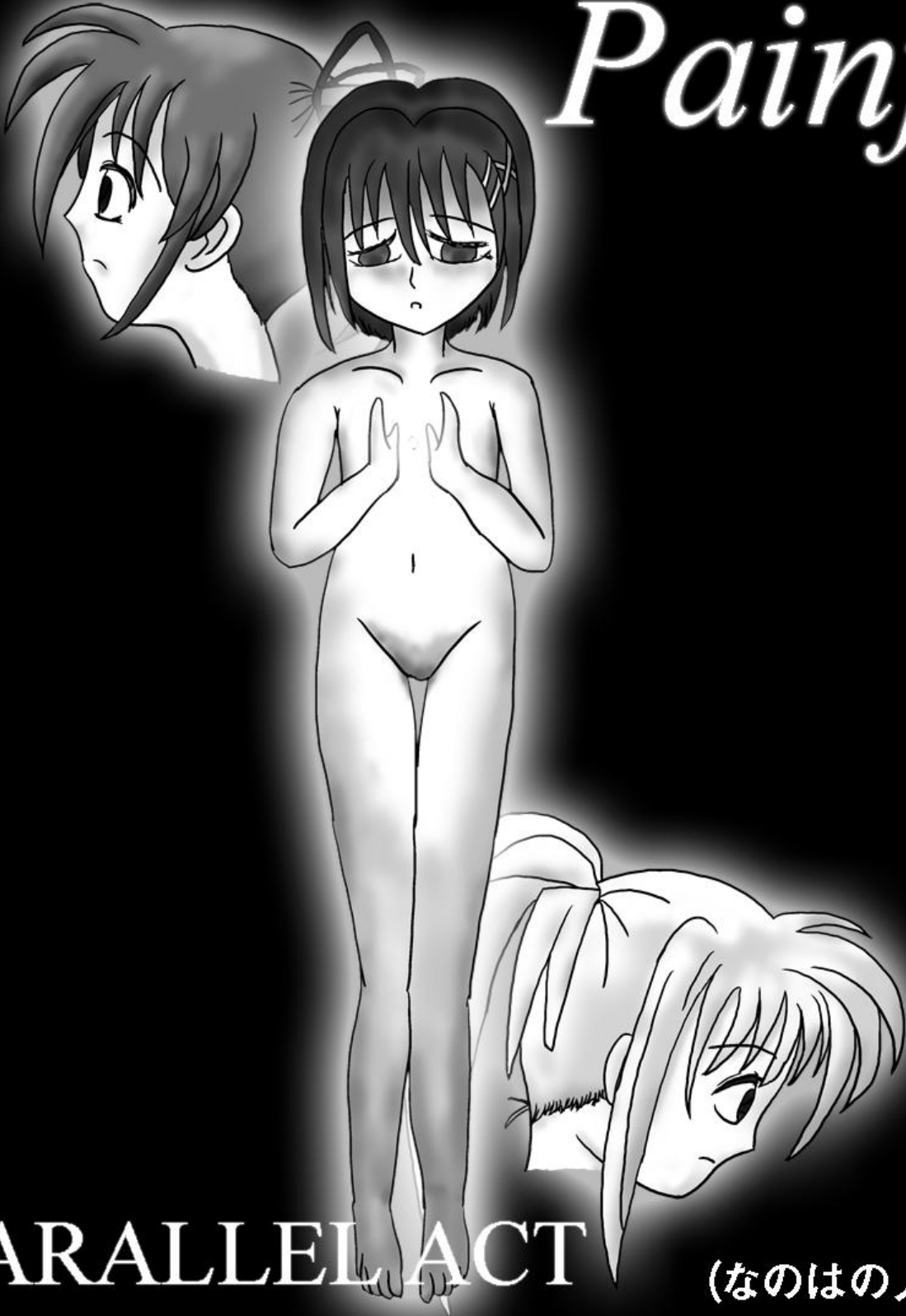


PainLess / Painful



PARALLELACT

18禁

(なのはの人生2回分)

PainLess / Painful

目次

| | | |
|------|-------|----|
| 第1章 | | 5 |
| 第2章 | | 8 |
| 第3章 | | 21 |
| あとがき | | 24 |

あらすじ

注意!! これは頒布促進用のあらすじです。当然ネタバレですので、本編をじっくりと読みたい方は、このページを読まないでください。

なお、微妙に本編と違う所がありますが、ご了承ください。

1

守護騎士がいない隙を見計らい、八神家に夕食をたかりに来たなのはとフェイト。皆で鍋の材料を切っている最中、フェイトはなのはの目を盗み、包丁ではやてを斬りつける。

2

なのはを台所に残したまま、フェイトとはやてはベッドへ。はやてが動けない事をいい事に、フェイトははやてを手籠めにする。

なのはが止めに入るが、フェイトの性奴隷であるなのは逆にサポー

トをさせられてしまう。はやてより先に絶頂してしまったのはからパイプを抜き取ると、フェイトははやての処女を奪う。

足の麻痺の影響で痛覚が無いはやてが味わうのは快感のみ。さらに、フェイトははやてのリンカーコアを取り出し、それを刺激するという荒技を使う。

意識を取り戻したなのはは、フェイトが実は処女だと見抜き、逆襲を開始する。壮絶な破瓜の痛みがフェイトを襲う。

第1章

1

闇の書事件から一ヶ月が過ぎた。事件についての取り調べや裁判は未だいま続いている。その為に、守護騎士ヴォルケンリッターとそのマスターであるはやては、別行動を余儀なくされることが多い。今日もはやては自宅にて待機、守護騎士達は事件現場と本局で仕事だった。罪の償いの為とはいえ、寂しい事には違いない。しかし、そんな時は決まって、なのはやフェイトが夕飯を共にしたり、泊まりに来ていた。

ピンポン。

「はい」

八神家のチャイムが鳴ると、はやては車椅子で親友の二人を出迎えた。玄関の鍵をリモコンで解除する。車椅子ではドアまで行って鍵を開けるのは大変でなので、わざわざ

土間まで降りなくても鍵の開閉が出来るようにしてある。

解錠かいじょうの音を確認すると、なのはとフェイトが食材を抱えてドアを開けた。

「おじゃまします」

冬とはいえ、家の中は暖かい。三人は食材が傷まないように、真っ直ぐ台所に向かった。

「今日シグナム達は？」

「みんなそれぞれ別の次元で実戦も兼ねた戦闘試験。普段はみんな一緒なんやけど、今日は個々の戦闘能力見るみたい。だからマスターもいたらあかんのやて。事件の種類も違うしな」

「へえ、珍しいね」

「シヤマルさんも戦闘に出てるの？」

シヤマルは本来戦闘ではなく、回復などのサポートを得意とする騎士だ。しかし、闇の書事件の時は速すみやかな回収の為に一緒に前線に立つ事も多かった。もちろんはやてへのアリバイ工作などで、離れて行動する事も多かったが。「ううん、シヤマルだけは本局に残ってカートリッジの充填」

「あまり闇の書事件の時と変わってないね」

「うん。シヤマルも『カートリッジの充填は疲れる』と嘆いとった。それにシグナムやヴィータに『使い過ぎや』と

怒つとつた」

「はは、大変だね」

「おかげでお肌の艶つやが無くなって来たんやて」

「……」

「……」

なのはとフェイトは、それ以上追求してはいけない気がしたので黙っていた。

「よっしゃ、じゃあまず材料切るか」

守護騎士達が帰ってくるのは深夜になってしまうとの事。

もし試験対象の事件が長引けば、今日はもう帰ってこられないかもしれない。仕方ないので、と言っよりその為に、

三人は夕食の準備を始めた。今晩は鍋だ。

「鍋つて、本局だとエイミーさんがよくやってるよね」

「うん、何でも、お姉さんが鍋大好きなんだって」

「へえ、だから色んな鍋知ってるんだ」

三人で、わいわい言いながら材料を切っていく。普段包丁を使うのははやてとフェイト。でも腕を上げたいと、今日はフェイトの代わりになのはが包丁を握っていた。

なのはがはやてに教わりながら材料を切っていると、後ろで別の準備をしていたフェイトが何か呟つぶやいた。すると、

まな板の上に置いてあった包丁がカタコトと動き出す。

(あれ?)

なのはは、まな板の上に置いてあった包丁が無くなっていく事に気づく。辺りを見渡し、床を見た所で、数十センチの血の海に気づいた。

「きゃあああっ!!」

「何? 一体どうしたん?」

「はやてちゃん! 足! 足!!」

「え? うわああっ!」

血の海の正体は、はやてのものだった。右の太股がさっくり切れて、血が大量に溢れていた。

「大変! 早く止血しないと」

フェイトが急いで駆け寄る。

「はやてちゃん、救急箱は?」

「あそこの、戸棚の中」

「分かった」

フェイトが治療しやすいように広い場所に移動させ、簡易治療魔法をかけて止血を試みる。そこになのはが救急箱を持って来る。

「はい、救急箱」

「何とか血は止まったから、私ははやてをベッドに連れて行く。なのはは、床の血を拭いてて。早く拭かないと、固まっ

て取れなくなっちゃう」

「え？ ベッドって…？」

なのはは、「ベッド」と言う単語に反応して一抹の不安と、恐怖を抱いた。その不安を払う為に、訊き直す。

「早く！」

「うん……」

フェイトは、なのはに疑問を抱かせる暇を与えない為かのごとく、急^せかせた。

「フェイトちゃん……」

なのは、はやての車椅子を押しに行くフェイトを悲しく見送った。

第2章

1

はやての部屋のベッドの上。治癒魔法をかけ終えたフェイトが、はやての足に包帯を巻いている。

「ごめんね、こんな時シャマルだったら完璧に治せるのに。私はあんまり治癒魔法は得意じゃないから」

「ううん、気にしへんて。元々痛くないし」「痛くない?」

「うん、下半身の痛覚がね、無いんよ。だから怪我しても分からんで、たまにびっくりするんや」

「そうなんだ、大変だね」「そう言つて、フェイトははやての内股をそっとさする。

「あっ♡」
「はやてが、可愛い声を上げる。

「あれ?」
「くすぐりたい、止めて。痛覚はまだ無いけど触覚とかは

段々と戻つて来とるんよ」

「そうなんだ...」

フェイトははやての内股をさするのを止めない。それどころか、範囲を広げ、また、奥へと指を進める。

「フェイトちゃん、だからくすぐりたい...」

フェイトは身体をはやてに重ね、耳元に息を吹きかけた。
「ひゃあっ!」

「はやて、耳弱いんだ」

「そんな事...そこ!」

フェイトの指が、白い布まで辿り着く。まだ誰にも触られた事のないその場所は、木綿越しにも関わらずフェイトの指の触覚を感じ取る。

「止めて! あかんで、そこは」

はやてはフェイトを押しつけようとするが、フェイトが指を動かす度に力が抜けていく。本当は足も閉じたいが、麻痺して動かないので、それは出来ない。

「はやて、真っ赤になって、可愛い♡」

フェイトは中指を筋窪すじくぼに当てがって、上下に動かす。段々と小さな突起が大きくなるのと、湿り気が広がってくるのを感じる。

「く、あっ...」

「何してるのっ!!」

なのはが、勢いよくはやての部屋のドアを開けた。はやてがその方向に振り向く。

「あ、なのは、掃除終わったんだ」

フェイトはこの状況を見られても、全く動じず、振り向きもしない。

「あ、なのはちゃん、助けて……」

はやてがなのはに懇願する。なのはならこの状況から救ってくれるかも知れない。しかし、その希望はフェイトの一言で打ち砕かれた。

フェイトは、ゆっくりと身体を起こすと、冷たく言い放つ。

「なのは、はやての服を脱がせてあげて」

「え？」

なのはとはやてが声を発したのは同時だった。二人とも青ざめる。

「フェイトちゃん、でも…… あっ!!」

なのはは突然スカートを、いや、その内側を押さえる様に手を伸ばし、うずくまった。何かに耐えつつも、身体が細かく震えている。そして「ブーン」と言う奇妙な音が小さく響いている。

「なのはちゃん？」

はやてが、心配そうになのはを見つめる。フェイトはベッドから降りると、なのはの後ろまで歩いて行き、力の入ら

ないなのはを抱えて無理矢理立たせる。そして、スカートに手を伸ばす。

「フェイトちゃん、止めて……」

「教えてあげようよ、はやてに。私達の関係を」

そういつて、ゆっくりなのはのスカートを捲り上げる。

はやては、なのはのその状態に息を呑んだ。パンツの股間の部分が少し膨れ、内部にある物体が振動している。なのはから溢れた液体は、布が吸収できる限界を超え、内股を伝って滴り落ちている。

「なのはちゃん……」

「見ないで、お願い……」

なのはは、涙を流して懇願した。はやての顔が蒼白になる。

「地球には面白いデバイスがあるんだね。それを参考に作ってみたんだ。普段は小さくして、なのはの中にあるの。でも、私の指示で大きくなったり、振動したりできるんだよ」そういつて、フェイトはなのはの股間に手を伸ばすと、パンツの上からバイブ状の官能デバイスを揺すった。なのはの身体が大きく弾む。

「止めて、フェイトちゃん……」

「なのはは、まだお尻は処女だったよね。いう事聞かないと、お尻の処女も貰うよ」

「そんな……」

「あ、はやてが抵抗しても、なのはのお尻は処女じゃなくなるから」

「ええっ!？」

理不尽な要求に、思わずはやても声を上げた。

「さ、どうする?」

フェイトは、なのはのお尻を撫で回しながら問うた。なのはとはやては、フェイトが本気だと確信して青ざめる。

「なのはちゃん、私の事なら、気にせんでええよ」

「はやてちゃん……」

「さ、脱がして……」

そう言っ、はやては両腕を伸ばした。

「ごめん、はやてちゃん」

なのはは、ベッドに向かってゆっくりと歩いて行く。その時、フェイトに念話通信を試みた。

『フェイトちゃん、まさかはやてちゃんの怪我って……』

『電撃魔法の応用。こっちでは「フレミング左手の法則」って言うらしいね。少し磁力と電流を流すだけで簡単に動いたよ』

『そこまで……』

なのはが流す涙に、悔しさも混じる。

なのはは、はやての服を脱がす。上半身は比較的楽だが、寝たままなのでスカートは難しい。同姓の下着姿は体育の授業で見慣れているとはいえ、脱がすのは恥ずかしい。いや、今回はむしろ後ろめたさでいっぱいだった。

スリッパを脱がすと、はやての全然膨らみのない胸が顕わになる。

「あんまり見んで」

「ご、ごめん」

なのはは視線をずらし、下半身に移動する。ちらりとフェイトを見るが、腕を組みながら、無言でそのまま脱がすように促している。

なのはは、観念してはやてのパンツに手をかけると、ゆっくりと降りし始めた。小さく、こぢんまりとした縦筋が現れる。お母さんのと違って、まだ毛は生えていず、可愛い。お姉ちゃんは昔生えていたけど、今は生えてないみたい。「どうして?」って訊いても、全然教えてくれない。「全部脱がしたよ」

なのはははやてのパンツを畳むと、フェイトに次の指示を問うた。

「じゃあ、次は自分の服ね」

やっぱり。予想はしていたので驚かない。なのはは、ゆっくりと自分の服を脱ぎ始める。

その間にフェイトも服を脱ぎ始めたが、躊躇^{ためら}いが無いので早い。はやてはフェイトの裸を見るのは初めて。白く美しい肌に、思わずため息を漏らした。守護騎士達の肌も白いが、彼女らと違って金髪なフェイトは、よりいっそう白く見える。

なのははパンツのみになったが、それに手をかけた所で動きが止まる。

「全部脱がないと駄目じゃない」
すり寄ってきたフェイトがなのはの耳元で囁^{ささ}く。

「はやてのパンツは降ろせても、自分のパンツは降ろせないの？ みんなで生まれたままの姿になるの？」

フェイトはそう言うが、今のなのはは例えパンツを脱いでも、生まれたままの姿にはならない。

「しょうがない子ね」

フェイトは身体を沈めると、なのはのパンツを降ろす。なのはは、口を嚙^くんで辱^{はづかし}めに耐える。パンツの下に現れたのは、なのはの大事な部分に刺さっている官能デバイスだった。

「なのはちゃん、それ……」

「凄いでしょ、なのははこんなに大きな物が入るんだから」

そう言うつて、フェイトなのはの股間に手を滑り込ませ、官能デバイスを揺らす。

「あっ……」

なのはが思わず声を漏らす。

「さ、なのは、ベッドに行こう。はやてを気持ちよくしてあげなきゃ」

なのははこくりと頷^{うなず}いて、渋々ベッドに向かう。そして、なのはがはやての右側、フェイトが左側に覆^おい被^かさる。その方が、お互いの利き腕ではやてを攻められる。

フェイトははやての左腕をどかし、脇腹から脇までツーツと舌を這^はわす。

「ひあああっ！」

はやてが悲鳴を上げる。全身がビクリと弾^{はじ}け、腹が上下する。

「ほら、なのはも……」

なのはは右胸から、鎖骨を通り、首まで舌を這わす。フェイトは左の乳首を口に含む。膨らみのない胸の乳首は当然小さく、フェイトの舌で「ロロロ」と舞う。

「やっ！ はっ！ ああっ!!」

「あっっ！」

刺さっている官能デバイスが振動を始め、はやてだけでなく、なのはも声を漏らした。

「はやてだけ気持ちよくさせてもつまらないでしょ」

そう言つてフェイトははやての下半身に移動し、足を開かせた。

「はあつ！ 嫌っ！ 見ないで、えっ！」

今まで誰にも見られた事のない場所を曝され、拒否の声を上げる。そして、手で隠そうとする。しかし、上半身はなのはに攻め立てられている為に、声は飛び飛び、腕にも力は入らない。

「こんなに綺麗で可愛いのに、隠しておくなんて、勿体ないよ」

フェイトは、はやての一番大事な所を覗き込む。まだ誰にも蹂躪された事のないその場所は、初々しいピンク色。まだ全然発達していない小陰唇は慎ましくて美しい。これが次第に醜く発達する事がフェイトには腹立たしかった。いや、はやてなら美しいまま発達するに違いない。そう思つて心を静めた。

愛液で濡れそぼり、キラキラと光る膣口は、なのはの愛撫とはやての喘ぎ声に合わせて、ひくひくと大きさが変わっている。まるで何かを欲しているように開閉している。もっとよく見ようと大陰唇を掴んで広げると、小陰唇の脇に白い物を見つけた。

「あ、恥垢見つけた。駄目だよ、お風呂ではちゃんと洗わ

ないと」

「嫌あつ!!」

はやては恥ずかしさが頂点に達し、両手で真っ赤な顔を掩った。

「私が綺麗にしてあげるね」

「嫌ああつ!! ひつく！ うえええ……」

はやては、恥ずかしさのあまり泣き出す。フェイトは無視して恥垢を舌で嘗め取る。口の中に独特の臭みが広がる。はやての恥垢を全て取り終わった後も、執拗に恥部を嘗め回す。その度にはやての身体が大きく痙攣する。舌を突起部に移動させ、丁寧に皮を剥き、クリトリスを直接刺激する。

「あつ！ はっ！ ぁっ……!!」

突然、はやての身体が、フェイトやなのはの愛撫のリズムとは違った周期で痙攣した。一瞬息が止まり、周りが何も見えていない様子だ。痙攣が収まると、ぐったりして動かない。

「いつちやったね」

フェイトは股間から顔を上げると、再び上半身に移動し、はやての顔を覗き込む。初めて味わう絶頂に意識を失ってしまった様だ。

「フェイトちゃん、もついいでしょ、止めようよこんな事」

なのはが、おずおずと抗議する。

「ふん、そんな事言っただ……」

「あうっ！」

官能デバイスの振動が激しさを増す。なのはは身体を支える事ができず、ベッドに突っ伏す。

「あっ！ あっ！ あっ！」

フェイトはなのはの背中を舌でなぞる。

「ひあ……」

フェイトはなのはの身体を反転させ、仰向けにすると、そのまま覆い被さる。なのはの股間で発生している振動が、自分の股間にも伝わってきて気持ちいい。官能デバイスの出力を上げると、なのはは堪らずフェイトに抱きついた。

「身体は正直だね」

「違…… 止め…… もう少し……」

フェイトは首元から耳の後ろに舌を這わせ、耳たぶを噛んだ。

「ひっ……!？」

その瞬間、なのはの身体が弓なりになる。暫くそのまま痙攣した後、気を失って、ベッドに沈む。部屋には、官能デバイスの音だけが響き続けた。

3

「う…… あ……?」

「気が付いた？」

「私、一体……」

「初めていった感想は？」

「!？」

目を覚ましたはやてに、フェイトが意地悪く囁きかける。はやては顔を真っ赤にして、答える事ができない。

「真っ赤になって、可愛い♡」

そう言つて、フェイトははやての股間に手を伸ばした。

「はやては痛覚が無いんだよね、じゃあ気持ちいいだけなんだ。羨ましい」

「そんな…… 事…… どうして？」

フェイトから与えられる刺激で、上手く言葉が喋れない。思考も途切れる。

「なのはは初めての時、とても痛がって、泣き叫んでたもの」

「え？」

はやての身体が少し硬直する。これから自分の身に降りかかるうとする事態に、少し気づいたようだ。

フェイトは身を乗り出し、気絶しているままなのはの

股間から、官能デバイスを抜き取る。そして、はやてによく見えるように、眼前に持って行く。

「これがなのはの処女を奪ったの」

「……」

はやては、初めて見る男根の形状に息を呑む。両親を早くに亡くしたはやては、本物の男性器を見た事がない。漫画に出てくる男性器は少年のもので、勃起したそれとは全く形状が異なる。その巨大でグロテスクな物体が、これから自分の中に入る事を想像して、はやては恐怖を感じる。

「はやての足、段々と回復してるんだよね。だったら、痛覚も戻ってくる。ねえ、痛覚が戻ってくる前に、処女膜を破っておいた方が良くと思わない？」

「え!？」

はやての顔が青ざめる。

「あかん！ それはあかんて!! やっぱり、処女は好きな人にあげるもんや!」

「はやて、私の事好きじゃないの?」

フェイトはとても悲しそうな顔をして見せた。

「そつやない！ そな、今はいないけど、将来好きな男の子ができたら!」

「はやては男の子なんかが良いの? 男の子なんて乱暴なだけだよ。女の子の身体の事なんて、ちつとも分からない

んだから」

「そんな事ない! ザファイラとか、とっても優しいし」

「ザファイラ? 大き過ぎて入らなさそう。それにはやては獣姦が好きなの? マニアックだね」

「違う!」

ザファイラには悪いけど、流石に獣姦は厳しい。それに主人が僕しもべとするのは良くないと、はやては考えた。他に身近な男の子はいなかったかと、急いで検索する。

「他にクロノ君も優しい……」

「クロノ童貞だから、きつと失敗するよ」

「……童貞? なの? リーゼさん達は?」

「遊びはしたけど、入れさせはしなかったって。と言うより、小さくてやる気が起きなかったって」

「小さいんだ……」

「顔に似合ってたね」

「……」

「ここではやては悩んだ。私の側に、他に男性っていたっけ? ギレアム提督はお爺ちゃんだし。学校に行っていないとはいえ、異性との出会いのない生活に落ち込む。

「話を戻そっか」

「ひっ!」

フェイトが中指を滑り込ませる。初めて自分の身体の中

に異物が入る感覚から、思わず奇声を上げる。

「はやての中暖かい。それにぬるぬるする」

「嫌！ 止めて！」

「指は嫌？ やっぱりこつちの方が良いよね」

フェイトは指を引き抜くと、はやての足をさらに広げ、官能デバイスを手を持つ。

「違う！ そんなもん欲しくない！」

フェイトははやてから溢れている液を官能デバイスに塗りつけると、先端をはやての膣口にあてがう。処女膜に覆われた小さな膣口に比べ、官能デバイスの直径は数倍も大きい。亀頭に相当する部分が小さな膣口を塞ぎ、外から見えなくなる。挿入しようとするフェイトでさえ、本当に入るのか疑問に思えて来るくらい大きさの違いがある。

「お願い！ 止めてえ!!」

はやての懇願を無視して、フェイトはゆっくりと官能デバイスに力を込めた。亀頭が周りの皮膚を巻き込んで沈んでいく。幾ら濡らしてあるとはいえ、まだまだ摩擦は大きい。それに処女膜が巨大な異物の侵入を防いでいる。

しかし、処女膜の弾力性には限界がある。亀頭が半分程埋まった所で、処女膜の一部が裂ける。フェイトは裂け目が出来て余裕の出来た膣口に向かって、なおも押し込む。さらにもう一ヶ所が裂け、小さかった筈のはやての膣口は、

自分の何倍もの大きさの亀頭をすっぽりと呑み込んだ。

はやては足と共に、膣括約筋まで麻痺している。処女膜が破られると、抵抗するものは何も無かった。

「先っぽ入ったよ。おめでとう、これではやては処女卒業だよ」

「酷い…… 止めてって言ったのに」

「でも、まだまだだからね」

はやてを無視し、フェイトはさらに官能デバイスを押し込んでいく。はやては、自分の下半身に圧迫感が広がるのを感じる。一番太くて窮屈な部分は通過しているので、後は潤滑油の働きでスムーズに進む。

ゴリツ。

力を入れても、デバイスが進まなくなった。どうやら、奥まで辿り着いたようだ。

「はやて、全部入ったよ。なのはに比べて浅いんだね。まだこんなに残ってるよ」

デバイスの長さにはまだまだ余裕がある。スライスをさせる際に都合が良いように、デバイスを短く変形させる。ただし、これからはやてが熟れて、より吸い込みやすくなる分は残して。

「動かすよ」

フェイトはゆつくりとデバイスを引き抜く。はやての中で愛液を纏まとい、ぬなぬらと輝いている。さらに処女膜が切れた事を示す、二本の赤い筋を帯おびている。かりくびが膣口まで来ると、再び挿入する。一連の動きを、段々とスピードを上げながら繰り返し返す。

「段々スムーズになってきた」

「う、あ、あ……」

はやてが声を漏らし始めた。

「もう膣で感じてきたんだ。やっぱり、痛みが無いと早いね。それとも、元から感度が良かったのかな」

「そんな、そんな事ない……」

はやては否定するも、膣で感じ始めて来たのは確かだった。もし痛覚が普通にあつたのなら、痛くてそれどころではなかっただろう。

「ふふ……」

「ああっ！」

フェイトは官能デバイスに指令を送り、細かく振動させ始めた。振動がピストン運動に加わり、複雑な刺激となつてはやてを襲い、嬌声きよつせいを上げさす。

デバイスをいっぱい押し込むと、今度は奥まで呑み込んだ。興奮が膣を柔軟にしている。フェイトは、デバイスが独りでに抜けないように、さらにクリトリスを刺激する

ような形に変形させる。

「ひああ」

デバイスが手を放しても抜けない事を確認すると、フェイトは恍惚こつこつとしたはやての顔を覗き込む。

「はやてどう？ 気持ちいいでしょ」

「そんな……」

はやては、顔を背けて答えない。

「もしはやてに痛覚が戻ってたら、最初からこんなに気持ち良くなかったよ。なのはも、開発には時間がかかったんだから」

「フェイトちゃん……」

はやての言葉を遮さえぎり、フェイトは意外な行動に出た。

フェイトが右手を何も無い空間に突き刺す。次の瞬間、はやての胸からフェイトの腕が生える。その手の中には、はやてのリンカーコアが輝いていた。

4

「がはっ!! あ…… あ……」

白目を剥むき、口も大きく開けたはやては、自分の部下がなのは達に負まわせたのと同じ苦しみに呻うめく。フェイトはゆつくりと右手を戻すが、はやてのリンカーコアは剥むき出しの

はまだ。

「フェイト…… ちゃん…… どうし…… て……」

「リーゼから教わったんだ、この方法……」

そう言つて、フェイトははやてのリンカーコアに舌でそつと触れた。

「はあっ!!」

はやての身体が激しく突つ張り、硬直する。フェイトはその様子を見た後、再び嘗める。

「ひ！ あ！ が！」

はやての目と口は大きく開かれたまま、涙に唾液に汗に愛液に、あらゆる体液が今まで以上に溢れ出ていた。

「リーゼが『リンカーコアを直接刺激するのは危険だけど、その分凄い快感が得られる』って言つてたけど、本当だね」

そう言つてリンカーコアを口に含む。はやての身体が痙攣する。はやては、フェイトの言つ事が何も聞こえていない。言葉ではなく、身体で返答したようだ。

「リーゼ達はお互いのリンカーコアを、互い口の中に含んで嘗めあつんだって。私達もそれが出来るようになればいいね」

一旦リンカーコアを口から出して、はやての耳元で囁くと、再び口に含む。はやての痙攣は止まらない。絶頂の状態が続いている。

「はんっ!？」

「ぎゃっ!!」

フェイトは自分の股間へ異物が挿入された刺激に驚き、思わずリンカーコアを噛んでしまつ。優しく舌で触れたただけで激しい刺激を受けるリンカーコア、噛まれたら堪つたものではない。はやては瞬間的に発生した激痛に耐えきれず、叫喚して気絶した。

フェイトはリンカーコアを口から出すと、振り向いて抗議する。

「なのは、いきなり何するの!? リンカーコアを扱ってるんだから、慎重……に……」

なのはのじつと据わつた目に、ただならぬ気配を感じ、フェイトは言葉を呑み込む。

なのはは、無言でフェイトの膣に挿してある中指をさらに進めた。指先がフェイトの未発達な子宮口を押す。

「あっ!」

身体の奥に痛みを受け、フェイトは小さく悲鳴を上げると倒れ込んだ。リンカーコアを露出する為に使っていた力も消えた為、リンカーコアははやての胸の中に吸い込まれていく。

「フェイトちゃん、今まで私の中にデバイスを入れても、自分の中には入れた事なかったよね」

なのはが淡々と語り始めた。

「フェイトちゃんなら、デバイスを同時に挿入出来るように変形させられるのに、した事なかったよね」

フェイトの顔が青ざめる。

「嘗めさせた事も、触らせた事も無かったよね」

なのはが、一旦中指を抜く。

「私、気づいちゃったんだ。フェイトちゃん、実は処女なんじゃないかって！」

なのはは、中指に人差し指を添^そえると、再び、そして一気にフェイトの膣に挿入する。愛液を纏った中指と違い、人差し指は乾燥したまま。それに、攻めるのに興奮して幾らかは愛液が出ていたが、自分が刺激を受けていた訳ではないので、十分濡れきってはいない。膣壁と人差し指が擦^すれる。

「ぎゃっ！」

フェイトはその痛みに悲鳴を上げた。そして、恐怖で身体が震えてくる。

「あ、まだ破れないんだ。丈夫なんだね、フェイトちゃんの処女膜」

なのはがにたりと笑う。

「ねえ、なのは、止めよう」

「どうして？ 私の処女は奪ったのに？ だからフェイトちゃんの処女は私が無くしてあげる」

「ごめん、その事は謝るから！」

「処女じゃなくなれば、二人でもっと楽しめるよ！」

なのはは再び指を抜いて、今度は薬指も添える。

(三本!?)

「シュート!!」

フェイトが感触から指が増えたことに気づいて、顔が引き攣^つった刹那^{せつな}、なのはは勢いよく三本の指を挿入する。

ブチッ！

本当に音がした訳ではなかったが、二人は確かに処女膜が裂ける音を聞いた。

「ぎゃっ！」

フェイトは短い悲鳴を上げると、はやての胸に突っ伏す。フェイトの膣口から幾筋かの赤い血が流れてくる。

「まだまだだよ」

そう言っつて、なのはは三本指の間隔を広げる。処女膜の裂け目が広がり、さらに何ヶ所か裂ける。

「ああっ！ 痛いっ!! 痛い！ 痛い！ 止めて！」

なのはは止めない。小指、さらに親指までねじ込ませると、処女膜を削ぎ落とそうとするかのごとく、ぐりぐりと

回転させる。

「あゝ!! 痛い! 痛いっ! 裂ける!! 止めて! 許して!」

「私もあの時お願いしたよね。『止めて』って。でもフェイトちゃん止めなかったよね」

破瓜の血が太股を伝う。フェイトの下で横たわるはやての血と混じり、シーツを汚す。

なのはは、右手でフェイトのクリトリスを探し当てると、思いつ切り摘まむ。クリトリスへの力任せの刺激は苦痛しか生まない。

「ぎゃああつ! あつ! くっ! 痛…い… うっうう… ひっく…」

悲鳴が嗚咽おえつに変わり、目から生気が抜ける。

6

「んあ…?」

はやてがゆっくりと目を開ける。全身が怠だるい。車椅子の電池が切れて、自分で必死に漕こいだ次の日みたいな感じだ。それに喉もからから。

ぼんやりとしていた視界と意識が、股間から伝わる奇妙な感覚と、耳に入る哭声こくせいによって、段々とはつきりとして

くる。

フェイトが苦痛で悲鳴を上げている。起き上がる力も失ったのか、はやての胸に頭を預けている。胸はフェイトの流した涙でびしょびしょだ。

「な、何やってんの?」

さっきまでとは状況が全く変わっていた。フェイトが二人を攻めていたのに、今ははやてがフェイトを攻め、しかもフェイトが泣き叫んでいる。

「あ、はやてちゃん気が付いた?」

なのははが、ようやくフェイトの股間から手を抜き、フェイトとはやての眼前に持ってくる。先程までフェイトを攻め立てていた指先からは、フェイトの破瓜の血液と愛液が滴したたり落ちていた。

「はやてちゃんもやって良いよ、フェイトちゃんへの仕返し」
そう言っつて、なのはは血まみれの手でフェイトの顔を撫なでる。まるで悪魔が取り憑ついているようだ。

「フェイトちゃんね、あんなに威張いはってたけど、本当は処女だったんだよ」

「はやて… ひっく… 助けて… ひっく… お願い…」

フェイトの腫はらした顔を見ると、仕返すする気が失せる。むしろ同情の念さえ抱く。

「取り敢えず、デバイス抜いてな」

「うん……」

フェイトは、はやてに挿して動作し続けていた官能デバイス
の動作を止め、簡単に抜けないようにしていた形状を
変形させる。その指令を送る事は出来たが、手には力が入
らず動かせなかった。はやては自分でデバイスを取り出し、
脇に置いた。

「フェイトちゃんどうする？ そのデバイスで犯る？ そ
れとも指で？」

そういつて、なのはは虚ろな目をしたフェイトの前で、
指を動かす。

「私はええよ」

「どうして？ はやてちゃんもフェイトちゃんに処女を奪
われたんだよ」

「仕返ししても、処女が戻ってくるわけじゃないしな」

「はやて……」

フェイトが少しだけ身体を起こし、はやての顔を見る。

「フェイトちゃんの様子を見てたら、今の内に処女で無く
なつてた方が良かったような気がするわ。こんな痛そうなの
の私嫌や。それに、フェイトちゃんもなのはに犯られて反
省したやろ。それで十分や」

「はやて、ありがとう……」

フェイトは、はやてに抱きついて嬉し涙を流す。

「でもフェイトちゃんも、セックスはちゃんと合意の上で
な。その方がお互い気持ちええで」

「うん、ごめんなさい」

「はやてちゃん、大人」

『そんな事ないで。それに、こうして恩を売っておけば、
もうフェイトちゃんは私に頭があらんやろ』

『……はやてちゃん、大人……』

第3章

1

「ただいまあ〜」

カートリッジ充填作業を終えたシャマルが、本局から転移してくる。肩を落として疲れ切っている様子だ。心なしか目の下に隈くまも出来ている。

「もうへとへと、みんな人使い荒いんだから〜」

闇の書事件の頃よりも、充填させているカートリッジの量は多い気がする。それもその筈、充填させているカートリッジはシグナムやヴィータのだけではないからだ。魔術の実験用や、緊急事態に備えての備蓄用のカートリッジもある。

それに、数は少ないがベルカ式魔導師も管理局には存在する。レイジングハートやバルディッシュの改造用パーツが直ぐに手に入ったのはそのためだ。ベルカ式魔導師なら自分でもカートリッジの充填は出来るのだが、罰も兼ねて

幾らかはシャマルが行っていた。

「身体は怠だるいし、肩は凝こるし、お肌は荒れるし、彼氏は出来ないし……」

誰も聞いていない事をいい事に、愚痴ぐちりまくる。なお、最後の愚痴はカートリッジ充填には関係ない。

「やけに静かね、それに暗いし」

はやては家にいる筈だし、なのはや Fayette も遊びに来ると言っていた。そう言っ日はいつも姦かしましい声が聞こえてくるのに、今日の八神家はシーンとしている。それに日も暮れているのに電気も点いていない。

「あら？」

台所を覗いてみると、料理の準備が途中のまま、材料や道具も放置してある。はやては料理を中断するにしても、必ず片づけていた。はやて達に何かあったに違ちがいなかった。「大変！ 何かあったのかしら」

シャマルは家の中を探し始める。まずははやての寝室からだ。

「あ」

ピンゴ！

はやてとなのはと Fayette の三人は、ベッドですやすやと寝息をたてていた。

「あらあら、しょうがない子達ね」

トランプエー
AAAランクの魔導師とは言っても、まだまだ九歳の子
供。遊び疲れて眠ってしまったんだろう。

シャマルは布団を掛け直そうと、毛布に手を伸ばす。

「あら？」

三人の肩が素肌だ。夏ならば肩口が開いた服もあるが、
冬なのに何故？

シャマルは、恐る恐る毛布を捲る。が、幾ら捲っても、
服はおろか下着も出てこない。それに部屋が暗くて最初は
気づかなかつたが、よく見ると服や下着は床に脱ぎ散らか
してあった。シャマルは一気に毛布を剥ぎ取る。

「きゃああっ!!」

シャマルはベッドの様子に思わず悲鳴を上げる。三人は
全員裸、シーツには血痕や染みが何ヶ所にも付いている。そ
こで何が行われていたのかは、想像もしたくない。シャマ
ルはこの惨状に気が遠くなるのを、なんとか持ちこたえる。

「ん、お早う……」

「あ、シャマルさん今日は……」

「ん、シャマルお帰り。あ、お夕飯の支度の途中だった。
待っててな、今急いで作るから」

シャマルの悲鳴で三人は目を覚ます。そして普段と同じ
ようにシャマルに挨拶する。

「お、お、お、『お夕飯』じゃありません！ これは一体
何なんですか!!」

2

それから、三人はシャマルにこつてりとしぼられた。シャ
マルは、両親のいないはやての保護者でもある。正しく性徴
を、いや成長を導くのも守護騎士の役目。残りの二人も、
自分の方が年上であり、指導するのは当然だった。経験で
は負けたけど。

その日、はやては罰で夕飯抜き。なのはとフェイトも、
お泊まりはなしで帰された。

シャマルは誰にも言わなかったが、歩き方がおかしかつ
たフェイトは、リンディ提督にばれて、こつぴどく怒られ
た。もうすぐ養子に迎えようとしているが、母親としての
最初の説教がこれとは、可哀想なものがある。

さらに次の日は、歩き方からばれるといけないので学校
を休んだ。事情を知らないアリサとすずかが「お見舞いに
行こう」と言うのを、なのはは理由を誤魔化して止めるの
に苦労した。痛みが引いてからも、フェイトは学校以外一ヶ
月の外出禁止になっていた。リンディ提督は貞操には厳し

いらしい。

その後、先を越されたと思ったシャマルは、男漁りに必死になった。変な男に引つかからないか、皆心配している。

フェイトの外出禁止が解けた後は、それぞれの保護者の目を盗んで三人で楽しんでる。三人とも処女でなくなつた為に、使える官能デバイスの幅が広がり、様々なプレイや体位を試している。はやての足が治ったら、さらに幅が広がるだろう。

フェイトはベッドの上だけでなく、はやてに頭が上がりなくなつた。フェイトとなのはの関係も、どちらかと言うとなのはが上になり、立場が逆転した。

「ねえ、なのは。今晚、良い？」

「良いよ。今夜は寝かせないから」

「♡♡♡」

あとがき

皆さんこんにちは。PARALLEL ACT主催者TomOneです。つたない本を手にとってくださってありがとうございます。ごめい
ます。

イベント前は仕事が忙しくなる法則が発動しましたが、前々日に代休取ることが出来て、完成させることができました。でも日付は実は変わっているので、印刷はイベント前日です。でもその日東京まで出向く用事があるんだけど(笑)そして深夜に寝台急行銀河で大阪です。

本編ですが、足の麻痺がネタとして使えるのは今だけかなど。本当はラブラブな話を描きたいんだけど、暗くなってしまうのはいつもの事です。最初タイトルははやて総受
けで、“Painless”だったんですけど、なのはをぶっしゅしゅ
か考えてたら、フュイト破瓜を加わえ、“Painless / Painful”

に変わりました。全員処女膜失って貰いました。本当は破瓜の痛みって、処女膜が破れるのは大した事じゃなく、濡れていないのに無理やりやることの方が痛いつて話ですけど、ファンタジーって事で(笑)

文章で苦労したのは、はやての科白せりふです。今まで『コナン』で関西弁キャラを扱った事はありますが、やはり関西弁キャラは難しいです。はやてはコテコテでなく、語尾が然り気無いくらいですが、そのさじ加減も難しいです。知合いの関西人に見て貰おうかと思っただんですが、彼は出張中で不在と言う状況。しかも大阪初売りと言う実は無謀な試みです。2年程奈良で暮したことはあるんですが、その程度で覚えるわけがありません。

そして、キャラの名前が二人もひらがなというのは困りました。人名が続くとひらがなだらけで、どこが文節の区切りか分かりません。それでちよつと読点を多めに入れます。

絵は、挿絵は時間と自分のスキルから諦めました。表紙だけは無いと話にならないので、頑張って描きました。漫画原稿用紙に鉛筆で下書き、COMIC WORKSでペン入れ、Photoshopで色塗りです。背景黒くしたので、トナー消費しまくりです。

Windowsの調子が悪いのか、良くタブレットの分解能

と筆圧が良くおかしくなります。抜き差し直せば直りますが、最悪USB自体までおかしくなります。メモリ管理回りが怪しいと思ってるんですが、クリーンインストール以外手を思いつきません。面倒なのでしたくないんですけど。

夏コミは、男性向けで申し込みました。サークルカットや補足説明には『なのは』と書いたので、おそらくその辺りに配置されると思います。

本は『なのは』の感想本の予定です。1期と2期で多分分冊になるかと思います。A'sの感想はfjに投稿した原稿があるので、キャプチャーとコメントだけです。1期の感想はこれからです。ヒョツとすると、6月のサンクりに委託しているかもしれせん。

それだけじゃなく、エロ本も出したいと思っています。ネタは未だありませんが。

10月の『マリみて』オンリーや、6月以降のは、まだ申し込むか決めてません。

それでは、ちゃんと面白い本が出せるように頑張りますので、夏コミでは是非お立ちより下さい。

'06年4月8日

TomOne

1975年6月28日、熊本生まれ。蟹座、O型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電腦天使』『マリア様がみてる』の同人誌を発表する。

PainLess / Painful

PARALLEL ACT SERIES

2006年 4月9日 第1版発行

定価はカバーに表示してありません

著者 TomOne
発行者 村上智一
発行所 PARALLEL ACT

URI <http://kikyou.sakura.ne.jp/~tomone/>

E-Mail tomone@kikyou.sakura.ne.jp

印刷機 あなたのプリンタ

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。

送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。

